

Y07b インターネット天文台、その進化と真価

松本 直記、坪田 幸政（慶應高校・地学）、佐藤 毅彦（東理大・FRCCS）

1998年より開発してきたインターネット天文台についてこれまで、構築（99年春）と教育実践（同秋）を報告し、2000年春季年会においては、第一版ソフトを配布するに至った。インターネット天文台1号機（慶應高校）と2号機（理大野田）は既に国内外からのべ40ユーザを越えるリクエストを受け付け、様々な環境下で使用され続けた。ユーザからのフィードバックを取り入れ、教育ツールとして更に洗練されたので、報告する。

使いやすさのアップ：日英言語選択機能により海外ユーザに対応／気象状況をグラフ化してウェブに掲載／観測開始・終了時にユーザと管理者にメールを自動送信し安全をチェック／ボタンの二度押しによる誤動作を回避／ダイヤルアップ接続が切れて再接続しても再ログオンを可能にするあいまいマッチ機能

ライブ動画配信も自動化：ログオン時に映像エンコードの自動起動・ログオフ時に自動終了／動画ファイルの自動生成／疑似ライブ機能により観測していない時も過去のアーカイブ映像を配信

観測機能のアップ：ビデオカメラの積分時間を遠隔操作化／太陽H α 観測装置導入（理大）／サブスコープ導入（慶應）／気象測器と連動／イメージインテンシファイア導入（理大）／疑似ズーム機能／I.I.の動作時に明るい天体のリクエストを受け付けない安全機能

これらの改良により、完全無人運用を目指したインターネット天文台システムはほぼ完成の域に達したと言える。実際に二基の天文台は、「中・高先生のためのパソコン・インターネット入門講習会」「夏休み親子科学教室」（理大生涯学習センター）や海外における教育イベント、慶應高校・理大の授業等において、完全無人で活用され、その真価を發揮した。詳細について会場で報告するとともに、改良版のシステムCD-ROMの配布も行なう予定である。